

## 『苦海浄土』と『黄金のノート』の接点

斎藤佳代子

ドリス・レスリング著『黄金のノート』は、リアリズム小説「自由な女たち」と色違いの4種類のノート群が細分化されたもの、そして黄金のノートで構成されている。初めはノート群は、「自由な女たち」の主人公である作家アナ・ウルフが書き溜めたものであるかのような印象を与えるが、実は、ノート群を書いたアナが完成させたものが「自由な女たち」であることが、終盤に出現する黄金のノートの中で判明する。完成された小説と素材たるノート群が対比される中でアナは両者の断絶に苦しみ、もはや言語が現実を伝えられないのでは、と煩悶する。この、言語に対する深い懐疑は近代社会に深く根ざしており、そこから逃れようもないが、やがてアナは、カオスを抱えつつも表現しようと願い続けることが重要なのだと悟るにいたる。

一方石牟礼道子の『苦海浄土』は『黄金のノート』のように体系だった幾何学的な構成ではなく、水俣病や水俣病患者をめぐる状況が、患者の語り、情景や状況描写、そして公的文書という三種類の文章が全体をとおして不規則に、時系列にとらわれず、ほとんどつなぎの説明もなく混ぜ合わされている。石牟礼は公的文書を、患者が「どのように深い生命の母胎につながっているか」を理解しない官僚主義やアカデミズムの象徴とみなしており、患者はこれに本能的な不信を抱いていると指摘する。また患者の語りは渡辺京二によると聞き書きではなく、石牟礼が患者の言葉を咀嚼したうえで患者の語りという形式に託して表出した石牟礼自身の語りである。近代と複雑に深く絡み合った言語に対する不信を石牟礼もたびたび表

明しているが、それでも言語を通して表現するしかないときに手法として編み出されたのがこの、患者の想いを凝縮したような語りと、近代の無機質性を象徴する公文書を混然一体と読者に提示する結果につながったのではないか。

レスリングは自分が「ヨーロッパの半分が墓場になり、数千万人が死んでいった年」つまり第一次世界大戦直後に生まれ、この戦争で心身ともに傷ついた父親から繰り返し戦争の話聞かされて育ったと述懐している。そのため近代という暴力の時代に敏感に反応し、もはや19世紀のリアリズム作家が使ったようには言葉を使うことができない、と訴える。また石牟礼も水俣病事件は「西欧近代が、技術史の中に貫徹させてきた合理主義の、もっとも荒廃した結合によって、日本近代化学産業は発展し」たその結果だと弾劾しており、この社会の枠組み作りに加担してきた言葉も崩壊寸前だと考える。

こうして近代社会の構築に重要な役割を果たしつつ、逆説的にその近代社会から意味を剥奪されてきた言葉だが、そうした言葉をまったく捨て去ることはできない。そうである以上、言語を通して何らかの工夫をして表現したい。そう考えた結果が二人の独特の手法になったのではないか。それは主客二元論と直線的時間を前提としたこれまでの近代文学の手法を根底から変質させたものであり、渡辺京二の言葉を借りるなら、「文学＝知識が構築する近代的な世界像が決してとらえることのできぬ生活世界における生命の充溢・変幻」を表現したもの、それがこの二作品だといえるだろう。